
planet aqua

三沢 馬太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

planet aqua

【Nコード】

N8766Q

【作者名】

三沢 馬太郎

【あらすじ】

病院からの帰り、おれがそのカフェに入っただのは夏がまさに盛り
に差しかかろうという昼下がりだった……

病院からの帰り、おれがそのカフェに入ったのは夏がまさに盛りに差しかかるうという昼下がりであった。そのあとはもの寂しい晩夏、そして秋が待っているだけの絶頂。そこを昇りきる直前の高揚感が都市を覆っていた。

汗を拭きながらクーラーのよく効いた店内に座り、氷いっぱいのレストランを口に含む。人々がせわしなく行きかう眩しい交差点。その中に明日香の姿を見つけた。

「お待ちせえ〜！」明日香はおれの姿をみとめると交差点をわたり、店に入ってきた。「大丈夫？ 昼休み」腕時計を指差す。

おれは微笑んでうなずいた。なんだかものすごくホッとした。

隣では、先客の女子高生二人連れが、かしましく先刻からお喋りを続けている。

「…で、どうだった、結果？」席に着くなり、注文したアイスコーヒー。ストローをつまみ、美味しそうに喉を鳴らす明日香。努めて明るく声を出しているようにも見える。「やっぱり取り越し苦労だったんでしょ…？」

「それなんだけど…」おれは目を合わせずに封筒を差し出し、明日香の話を強引にさえぎった。近くの大学病院名が記された封筒。

「なあに〜！ わざと深刻ぶっちゃって」明日香は甲高い声を出し、引きつった笑いを浮かべる。しかし目を合わせようとしない。

「…でさ、ヒロシなんか、この前十円八ゲが見つかったみたいでヨ
ー！」

「うっそ、やっべー！」

ギャはハハハ！ 女子高生が必要以上に大声をはり上げる。「ど
んだけ若八ゲえ！？」

どうして平日の、それも昼下がりから高校生たちがこんなところ
でたむろしているんだ？ という疑問は、ばかっている。とっくの

昔から、高校生たちには正規の時間割なんてありやしない。

左鎖骨の近くにしこりをみつけたのが梅雨に入ってから。春先からどうも微熱が続き、倦怠感を感じていたが、食後に頻繁に吐くようになるまではあまり深刻には考えなかった。忙しさにかまけ、健康診断にも行かなかったのが発見を遅らせたようだ。

「手術でも、取り切れないって」おれは封筒からPET写真を取り出した。血管・リンパ腺が形づくるおれの身体の輪郭。その中、主に左側に黒い「染み」が首筋まで繋がっている。特に胃と腸の上部のあたりに染みが集中し、胃の一部などは真っ黒に塗りつぶされていた。

「うそっ!？」明日香は電氣にあたったみたいに首筋を伸ばすと両目を見開き、両手を口にあてた。「だって、そんなの…今は薬飲めば治るはずだし。親の時代ならもうだめってわかるけど…」

「ありえねー! ありえねーべ!」

ギヤはハハハ!ふたたび女子高生たちが呵呵大笑。手首だけで力なく両手を叩く若い女性特有の‘ならい’は数十年前と変わらない。

おれは舌打ちする。彼女たちの尊大な若さ、そして開かれた未来への嫉妬が苛立ちに拍車をかける。

「そりゃそうだけど…やっぱりここまで広がると、手遅れって感じみたいでさ」

「すみません、久本さん。科学技術が進歩したと言っても、通信分野なんかと違って、生理学とかの医学の分野って、意外と成長が遅いんですよ。」

自分と同年ほどの根暗そうな医者、ゲームの敗因を述べるごとき恬淡たる口調がよみがえる。まるで医者である自分はいくまで解説者にでも撤しようと言わんばかり。

エイズの進行が薬で抑えられるようになったと同様に、抗がん剤の開発が進み、ある程度の進行がんでも副作用無しで、劇的に進行を遅らせることができるようになった。ガンマナイフも精度を増し、切除の負担もかなり減った。

「言ってみれば、もうおれの身体半分以上切り取らなくちゃ無理っ
ていうくらいのレベルらしい。こればかりは、どうも、今の技術
でも無理みたい」

おれは一昨日飲んだカプセル・カメラの写真も取り出した。ま
だ体内から排泄されていないが、無線で送られてきたデータを病院
が既に現像したもの。

「いやっ、やめて」明日香は目を逸らした。無理もない。胃の中、
大きいこぶしのような細胞の塊がその空間を大きく塞いでいる様は、
いかにも悪性の、不吉な色合いを帯びている。

「どうしてそんな他人事でいられるの!？」明日香は目に涙を溜め
ていた。

「さあ……」おれにも分からない。これがまるで、おれの身体の中
にあるとは思えない。現実には吐き気等不快感は多少あるものの、こ
うして日の差す昼間、オフィスや街中で人に囲まれていると、まだそ
んなネガティブな想念は湧きようもない。しかし、分かる。やがて
症状も進行し、夜になれば、抑圧された死の想念が溢れ出し、眠れ
なくなるのだらう。

「ヒロシんち、ゲーハーの家系っぽいよ??」

「そんなんぢや、まぢやバくない?」

「そうなんよ、まぢやバいのに、あいつ、『いや違う、これはハゲ
じゃねえ。昔の傷の一種だ』って」

「うそ、何? 現実トーヒじゃん」

「そう、現実トーヒ」また、ギャはハハハ! 笑う。バタつかせた
ナマ足の、ピンクのゴム長靴を光らせて。

「現実逃避、か……」おれはまるで“他人事のように”窓の外を見た。
もちろん「それ」は、恐い。けど、やっぱり自覚症状がもつと
顕著になるまでは、無理なんだらう。それが人間の元来の性だし、
そうした非現実性への逃避の傾向は、生活のヴァーチャル化に慣れ
親しんだこの数十年間で、ますます拍車がかかっているように思え
る。

「ねえ、頑張ろう。あたしも、靖史のために頑張れるから」明日香が手を握ってきた。

「ああ。もちろん」明日香の手の温もりに、おれはいま初めて、おれ自身の生命の存在とその限りを認識せざるを得なかった。皮肉なものだ。おれは明日香の手を強く握りしめた。「そりゃ恐えよ、……おれだって、……怖い」

店内のテレビのニュースでは、数年前に完全消滅した南太平洋の環礁上の独立国家の離散民の、各国の受け入れ態勢の違いを伝えていた。日本と言えば、やはり受入れに消極的であり、他民族への相も変わらぬ狭量さを露呈していた。天気予報では、明日の東京の最高気温は四十二度に達しそうだという見込みを報じ、以前にも増して細くなつた列島地図を映し出していた。

「……結婚、すんの？ ヒロシと」

「さー。わがね」女子高生の片方が、睫毛にカーラーをあてながら言う。「だってまだ、ぜんっぜん先のことじゃん」

「まあね、まだ人生、クソ長えし。あーあ、ヒマすぎ？ そんなのって」

「言えすぎ！」

ギャハハハ！

おれの携帯が鳴った。部長からのメールだ。

ー取引先とトラブル。大至急、戻れ。

「やば……」おれは焦った。こうしたメールは日常におれをつなぎとめてくれる。しかし同時に、己自身の「非常時」にも関わらずこんな日常の「些事」に焦る、自分の心理に皮肉さえも感じる。

「……もう、昼休み、終わるから」メールの内容は告げず、おれは明日香に腕時計を見せて封筒を鞆にしまい、立ち上がった。「出よ」

「うん。今夜、またウェブするから」明日香も立ち上がった。「P Cの前、居てよ」

「わかった。……あれ？ 長靴、変えた？」

「うん。今年の流行。豹柄、可愛いでしょ」

「ああ」

絶えず消費し消費させ、経済活動を繰り返してきた資本主義の自己再生能力。そんな人間の集団的かつ自動的な営みに、おれは畏怖さえ覚える。

カフェの自動ドアが開く。

眩い日差しと猛烈な暖気が、瞬時に身体を包んだ。

おれは明日香の手を取り、街路に踏み出した。そしてくるぶしまである海水をじゃぶじゃぶいわせながら、オフィス街の交差点を渡った。

（後書き）

2007年7月15日に書いた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8766q/>

planet aqua

2011年2月15日22時10分発行